

洞院撰政家百首における定家の歌

— 恋の歌を中心として —

岩崎禮太郎

「洞院撰政家百首」(貞永元年・一二三二成立)が成立したとき、定家は七十一歳になっていた。

安田章生氏は、この百首の定家の歌の中の佳品と見るべきものとして左の六首を引用して、更に次のように述べておられる。

いつしかと都の野辺はかすみつつ若菜つむべき春はきにけり

(霞)

かずまさるわが新玉の年ふればありしよりけに惜しき春かな

(暮春)

山人のうたひて帰る夕べより錦を急ぐ峰のみみちば

(紅葉)

いたづらに松の雪こそ積るらめわが踏みわけしあけぼのの山

(雪)

もしもきのとのへを出づる宵々は待たぬにむかふ山の端の月

(眺望)

吹きはらふもみぢの上の霧はれて峰たしかなる嵐山かな

(眺望)

すぐ前の期(稿者注……一二〇六〜一二二一・定家四十五歳〜六十)

洞院撰政家百首における定家の歌 — 恋の歌を中心として —

歳・安田氏のいう「有心体確立期」の後半の歌について、ここでも、いったいに表現が平明となり、艶よりは平淡により近い美が現われている。また、定家特有の鍛えられた調べや構成的な手法も見られるけれども、平明な抒情性を増していることが認められる。こうしたところに、定家晩年の作品が描いた嶺があったといべきである。以上が安田章生氏の論である。

他方において、塚本邦雄氏は、「『拾遺愚草』上巻の一番終りにある、最晩年に近い七十数歳のときの「関白左大臣家百首」(稿者注、「洞院撰政家百首」に同じ)、これがまた絢爛として修辭の限りをつくした歌です。「六百番歌合」も鼻白むばかりのね。」と書いておられる。

最初に引用した安田氏の論は、恋の歌(この百首の中の二十五首)には全く触れていない。本稿では、この百首における定家の歌について、恋の歌を中心として分析し、その位相をさぐってみよう。

建保期において、万葉歌をふまえた歌が多かったのであるが、こ

〔第一表〕

家隆	定洲	
(4) $\frac{3}{50}$	(8) $\frac{3}{50}$	六百番歌合 (建久四年・一九三)
(4) $\frac{2}{10}$	(4) $\frac{0}{10}$	正治院初度 (正治二年・二〇〇)
(7) $\frac{0}{15}$	(9) $\frac{2}{15}$	千五百番歌合 (建仁元年・二〇一)
(22) $\frac{11}{25}$	(15) $\frac{9}{25}$	内大臣家 (建保三年・二一五)
(9) $\frac{1}{20}$	(11) $\frac{3}{20}$	内裏名所 (建保三年・二一五)
(14) $\frac{1}{15}$	(14) $\frac{6}{15}$	建保四年院 (建保四年・二一六)
A(10) 4 B(8) 8 C(7) 7 (注4) 25	(5) $\frac{1}{25}$	洞院撰歌家 (貞永元年・二二二)

の百首を調査してみると、定家の歌においては、それが急減していることが目立つのである。参考とするために、家隆をも含めて、「六百番歌合百首」(一一九三)以降の百首について、万葉歌をふまえた歌を調査すると、第一表のようになる。第一表において、括弧内は該当する歌の数、括弧の外の分数は、恋の歌の数について、分母が恋の歌の総数、分子が万葉歌をふまえた歌の数を示す。

右の第一表にとりあげた定家の恋の歌で、万葉歌をふまえている歌を「建保四年院百首」以後について記すと、次のとおりである。

建保四年院百首

よもすがら月にうれへてねをぞなく命にむかふ物思ふとて(続

後撰八恋二〇所収)

(本歌) 万・六七八「直に逢ひて見ばのみこそたまきはる

命にむかふわが恋やまめ」

暮るる夜はおもかげ見て玉かづらならぬ恋する我ぞ悲しき

(本歌) 万・一〇二「玉かづら花のみ咲きて成らざるは誰が恋ひにあらめ吾は恋ひ思ふを」
いかにせむ波こそ袖に散る玉の数にもあらぬ賤のをだまき

(本歌) 万・六七二「倭文たまたき数にもあらぬ命もてなにしここたわが恋ひわたる」
ねに立つるかけの垂れ尾の誰ゆゑか乱れてものは思ひそめてし

(本歌) 万・二四一三「庭つ鳥鶏の垂尾の乱れ尾の長き心も思ほえぬかも」

秋の野に尾花刈り暮く宿よりも袖ほしわぶるけさの朝露

(本歌) 万葉・七「秋の野のみ草刈り暮き宿れりし宇治のみやこのかりいほし思ほゆ」

下ひもの結ふ手もたゆまかひもなし忘るる草を君やつつけむ

(本歌) 万・七二七「忘れ草わが下ひもにつけたれど醜の醜草言にしありけり」万・三一八三「みやこべに君は去にしを誰解

けかわがひもの緒の結ふ手たゆしも」

「洞院撰歌家百首」になると、第一表に示したように、家隆においては引き続き万葉歌をふまえた歌がかなりの数詠まれているのに、定家においては急減し、恋の歌では次の歌ただ一首となっていることが目立つことである。

道のべの人ごとしげき思ひ草霜のふりはと朽ちぞ果てぬる

(本歌) 万・二二七〇「道のへの花がもとの思ひ草今さらに
 など物か思はむ」
 (怨恋)

三

次に、この百首における定家の歌においては、序詞(註)を用いた歌が減少している。

「六百番歌合」以降の百首において、序詞を用いた歌の数を、定家と家隆とについて調査すると、第二表のようになる。第二表において、括弧内は序詞を用いた歌の数、括弧の外は恋の歌のみについての該当する歌の数を示す。

〔第二表〕序詞を用いた歌

六百番歌合百首	正治院初度百首	千五百番内大臣家内裏名所歌合百首百首	建保四年洞院撰政家百首
定家	家隆		
(5) 5	(2) 2	(1) 0	(7) 4
(2) 1	(0) 0	(1) 1	(4) 3
(1) 0	(1) 1	(8) 7	(7) 6
(11) 8	(6) 4	(6) 4	(注 3)
(11) 10	(8) 4	(7) 4	
(7) 4	(7) 6	(4) 3	

万葉集以来、序詞を用いる歌の大部分は恋の歌である。

右の表の中の、「建保四年院百首」における定家の恋の歌で序詞を用いたものを参考のために掲げると、次のとおりである。

其の百首における恋歌の数

洞院撰政家百首における定家の歌 — 恋の歌を中心として —

いかにして向ひの岡に刈る草の束つかのまにだに露の影見む
 いかんせむ波なみこす袖に散る玉の数にもあらぬ賤しづのをたまき
 ねに立つるかけの垂れ尾の誰ゆゑか乱れてものは思ひそめてし
 「洞院撰政家百首」の恋の歌における、序詞を用いた歌三首は、
 五の(8)(4)(5)に記載したとおりである。

「建保四年院百首」と「洞院撰政家百首」とにおける恋の歌の総数は、それぞれ十五首と二十五首とである。従って、定家の恋の歌で序詞を用いたもの数は、前者の415から後者の325への減少である。そうして、一方家隆における該当歌の数は415↓625となつてゐることからみても、定家における減少に注目されるのである。「内大臣家百首」「内裏名所百首」の恋の歌は、名所を入れることが条件となつてゐるので、地名を含めた物象部分を序詞として、次の心象部分に続けることが多くなるため、序詞が多く用いられたという事情は考えられる。そうして、「内裏名所百首」の恋二十首において、序詞を最も多く用いた歌人は定家であつた。

〔第三表〕万葉集および八代集序歌出現率

万葉集	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集
四五二七四六	一一二二二	一四二六	一三五一	一一二〇
一六	一一	六〇	八九	三八
%	%	%	%	%
金葉集	詞花集	千載集	新古今集	
七一	四二	二八五	一九七九	
二九	一八	四一	九九	
%	%	%	%	%
四	四	三	五	

そもそも序詞は、古来の和歌集の中で万葉集に最も多く用いられている。このことは、第三表⁽¹¹⁾によって知ることが出来る。

このことから考えると、序詞の使用の減少ということは、万葉歌をふまえた歌の急激ということと関係があると考えられる。

万葉集における寄物陳思歌は、全万葉歌の五分一に達している。

その多くが序詞を用いて、心象表現のことばと物象叙述のことばとを対応させてイメージを作りあげている。定家が建保三年ころ著した「定家八代抄」には、三代集および新古今の万葉歌が合計一〇〇首採られている。また、第一表で示したように、定家は建保期において、万葉歌をふまえた歌を多く詠んでいて、万葉集における寄物陳思歌の影響を受けたと考えられる。

いわゆる「有心の序」といわれる場合は、藤平春男氏が言われるように、「抒情的部分の適及的反響が先行の叙景的部分を心象イメージと化するものであるが、この場合、抒情的(恋情)部分は比較的単純な感情しか表わさないのが普通なので、一首のつくり出す美的観念も単純なものにとどまっているのである。」定家は建保期⁽¹²⁾において、比較的単純ではあるが、明確なイメージを結び、一首の統一感を重んずる歌を多く詠んだのであった。

四

定家が貞永元年(一二三二)六月十三日に勅命を受けて単独で撰に当たり、文暦二年(一二三五)に実質的に完成した「新勅撰和歌集」においては、万葉集所載の歌が五十六首ほど見えている。(恋の部を見ると三九五首のうち序詞を用いた歌が六十八首も採られている。)

「新勅撰和歌集」には、定家の歌を十五首自撰しているが、そのうち万葉歌をふまえた歌が三首あり、序詞を使用した歌が三首ある。

このように、この時期において、定家には万葉歌への関心は失われていない。それにもかかわらず、「洞院撰政家百首」における定家の詠歌において、万葉歌をふまえた歌が急減し、また序詞の使用が減少しているのは、どういう理由であろうか。

ここで視点を転じて、定家の和歌における心の志向の一例を考えてみよう。新古今集に採られた定家の歌、

時分かぬ浪さへ色にいづみ河ははそのもりにあらし吹くらし

(秋下、五三二)

に関して、久保田淳氏は「眼前の優艶な情景から、上流で美しいはその森に加えられる嵐の荒々しい力を想像するのは、中世的美意識かもしれない。中世人は、美に安住することができないのである。」と述べておられる。この歌において、定家は眼前の優艶な美にひたすらひたるということができず、そこにはないところの嵐の力に心を走らさずにはいられないのである。また、定家の歌、

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

(新古今・秋上三六三)

に関して、佐々木幸綱氏は「定家の心の目は、そこに思い描いたはずのもの、寂しい秋の日暮れ海、海辺の粗末な一軒家に集中的に向けられてはいない。むしろ、その心の景色にはない花や紅葉に向けられようとしているのである。眼前に△あるもの▽にのめり込むことができず、そこには△ないもの▽に心を走らせずにはいられ

ない定家の姿勢が鋭く表現されているとしてよからう。」と述べておられる。

このような、眼の前にあるものに満足せずに、絶えず眼に見えないものに心を走らせるという定家の志向は、やがて新勅撰和歌集の和歌の配列において、△相反する風情の歌の並列配置▽という構成をとることもなつて現れたのであろう。また、それは歌の創作手法において、いつも同じ手法には満足しないという志向に通ずると考えられる。

この、定家の同じような手法に満足しないという志向が、万葉歌をふまえた歌を多く詠む方法にいつまでもとどまることを避け、そこから脱却しようとしたのではあるまいか。

ところで、『新勅撰和歌集』において、万葉歌や序詞を用いた歌を多く採っているのは、選歌範囲が長い期間にわたっていることにも関係があり、巨視的にはそのような関心が失われていないことを示すものである。しかし、定家の創作の歩みにおいて微視的にとらえれば、「建保四年院百首」（一一二一六）から「洞院撰政家百首」（一一三三二）の間において、万葉歌をふまえた歌を多く詠むという方法からの脱却があつたと考えられるのである。

五

定家は建仁期において、

④景と情とを緊密に織りませ、繊細な景物の世界を感覚的に提示することに、複雑な意味内容を表し、深い情感を気分情調として漂わせるという詠法、

洞院撰政家百首における定家の歌——恋の歌を中心として——

によつた恋歌を詠み、

しろたへの袖のわかれに露おちて身にしむいるの秋かぜぞふく

（建仁二年水無瀬殿恋十五首歌合、新古今・恋五）

をはじめとして、巧緻な余情妖艶の気分的象徴歌⁽²⁾があつた。

「洞院撰政家百首」における定家の恋の歌で、ほぼ④の詠法によつていけると言える歌には、

(1)おのれのみあまのさかてをうつたへにふりしく木の葉跡だにもなし（怨恋）（新拾遺△恋五▽入集）

（参考歌）久安百首・恋、新勅撰恋五俊成「いかにせんあまのさかてをうちかへしうらみても猶あかずもあるかな」

伊勢物語「秋かけて言ひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ」

(2)道のべの人ごとしげき思ひ草霜のふりはと朽ちぞ果てぬる

（怨恋）

（本歌）万・二二七〇「道のべの花がもとの思ひ草今さらになど物か思はむ」

（参考歌）万・五四一「この世には人ごとしげしこむよにもあはむわがせこ今ならずとも」

古今・大歌所御歌「水荃の岡の館みかたに妹とあれとねての朝けのしものふりはも」

の二首がある。自然の景と恋の状況および心情とを結びつける工夫はなされているけれども、先にあげた④の詠法による新古今集の歌と比べると、いずれも美的情調がはるかに希薄になっている。建保期における定家の④の詠法の歌、

わが袖にむなしき波はかけそめつ契りも知らぬ床の浦風（内大臣家百首・恋）（続後撰八恋一ⅴ入集）

ふくる夜を心ひとつに恨みつつ人まつ鳥のあまのもしほ火（内裏名所百首・恋）

と比べても、美的情調の希薄化は認めざるを得ないであろう。

⑧景物を取り込んだ恋の歌で、景物は序詞的表現に用いられていて、それが急転して抒情的部分に連なつて恋歌となる詠法。（この詠法の歌においては、景物を描く部分と心情を述べる部分とが区別できる。）

この⑧の詠法の歌は、既に「定家卿百番自歌合」の恋部（六十首）において、

あだ浪の高師の涙のそなれ松なれずはかけてわれ恋ひめやも

（建保三年内裏名所百首、続古今八恋二ⅴ入集）

などがあった。この百首においては、

(3)口なしの色のやちしほ恋ひそめし下の思ひやいはで果てなむ

（忍恋）

（参考歌）六百番歌合・頭恋・隆信「人知れぬ心のうちに染めし色もちしほになればかくれざりけり」

(4)植えしげる垣根がくれのをさき原知られぬ恋は憂きふしもなし

（忍恋）（続後拾遺八恋一ⅴ入集）（定家卿百番自歌合）

（参考歌）古今・雑下・凡河内躬恒「今さらに何おひ出づらむ竹の子のうきふししげき世とは知らずや」

万葉・一五〇〇・大伴坂上郎女「夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ」

(5)こと浦にこるや塩木の名に立てよもえてかくれぬ煙なりとも

（忍恋）

（本歌）後拾遺・恋一・道命法師「潮垂るる我が身の方はつれなくてこと浦にこそ煙立つなれ」

の三首がある。この三首は、それぞれよく工夫されていて、表現効果を発揮していると考えられる。(3)の歌は、参考歌をふまえて、更に発展させている。(4)の歌においては、下句が上句に響いていて、「をさき原」の「ささ」の「ふし」は見えないだけであって、実際には「ある」ことを言外に暗示していて、含蓄のある歌になっている。(5)の歌は、本歌における「こと浦にこそ煙立つなれ」を利用して、忍恋の苦しさを脱するために、むしろ煙が立ってほしいと願う歌に変えているところが巧みな技巧である。

この百首から定家が「新勅撰集」に自撰したのは、紅葉題一首と眺望題一首とであつて、恋の歌は全く入集させていない。

次に、この百首における定家の恋の歌から「定家卿百番自歌合」に採られた歌は四首ある。その四首は、前掲の(4)および次の三首である。

(6)夜な夜なの月も涙に曇りにき影だに見せぬ人を恋ふとて（不逢歌）（新千載八恋一ⅴ入集）

(7)今のまのわが身にかぎる鳥のねをたれ憂きものと帰りそめけむ

（後朝恋）

(8)はるかなる人の心のもろこしはさわぐみなとにことづつてもなし

（遇不逢恋）

(本歌) 伊勢物語「おもほえず袖にみなとの騒ぐかなもろこし
船のよりしばかりに」

(6)の歌は、月を見て涙を流す恋の歌として、

まつ山とちぎりし人はつれなくて袖とす波にのこる月かけ(新

古今・恋四・定家、定家卿百番自歌合に自撰)

と比べると、技巧の跡のない素直な抒情歌になっている。また、

おもかげのかすめる月ぞやどりける春や昔の袖の涙に(新古今

・恋二・俊成女)

と比べても同様のことが言える。(7)の歌は、理知的に構成されているが、上句と下句と対応して、今自分だけが鳥の音を憂きものと思いながら帰るという後朝の気持をひとりで思いめぐらして、他の人々もそうであろうと考える過程が言外にこめられ、下句に上句の自分の感情を重ねているところにせつなさが感じられる。(8)の歌は本歌取の歌であることが明らかである。「もろこし」がもろこし船の意味、「さわぐみなど」が涙のあふれる袖の比喩であることが知られ、「もろこし」「みなと」「ことづて」という縁語関係を読んでゆくと、「ことづてもなし」に到って「遇不逢恋」のつらい心情を余情として感じさせる、巧みな歌になっている。

その他の歌で佳作と思われる歌を四首ほど次にあげる。

(9)起きわびぬ長き夜あかぬ黒髪の袖にこぼるる露みだれつつ

(後朝恋)

男の立場で詠み、相手の女の姿態の焦点として黒髪をとらえ、その女が別れを惜しんで袖にこぼす涙の露の乱れを見て、男が起きわび

洞院撰政家百首における定家の歌 ―恋の歌を中心として―

ているという歌となっていて、後朝の二人の姿態と心情とを浮かび上がらせている。

(10)朝露のおくを待つまのほどをだに見果てぬ夢をなににたとへむ

(後朝恋)

(本歌) 大和物語「おく露のほどをも待たぬ朝顔は見ずぞな

なかあるべかりける」

(参考歌) 古今・恋二・忠岑「命にもまさりて惜しくあるもの

は見果てぬ夢のさむるなりけり」

大和物語の本歌の言葉を用いて、後朝において惜しまれるわずかな時間を表し、古今集の忠岑の歌における、恋人と逢った夢の意の「見果てぬ夢」という語を、ここでは夢のようなあわたたしい男女の契りの暗喩として用い、後朝にも名残惜しい共寝を続けたいと思っているのに、別れて帰らなければならぬ悲しさの情を強く出している。

(11)初めより逢ふは別れと聞きながら晝知らで人を恋ひける(後朝

恋)(続拾遺八恋三V入集)

「逢ふは別れ」は「あふは別れのはじめ」の意であって、「日本国語大辞典」によれば、「法華経、譬喩品」の「愛別離苦、是故会者定離」または「白氏文集、卷十四」の「合者離之始、楽今憂所伏」から出たものである。この歌は下句によって後朝恋の歌であることが知られる。上句に後朝の別れの不可避なことを諺によって表した点が珍しく、「ながら」という接続助詞によって上句と下句をつないだことによって、下句における、理性で割り切れない後朝の別れの悲しさが生きている。

⑫はかなしな夢にゆめ見しかげろふのそれも絶えぬるなかの契り
は (遇不逢恋)

(本歌) 拾遺・恋二・よみ人しらず「夢よりもはかなきものは
かげろふのほのかにみてし影にぞありける」

(参考歌) 古今・恋四・よみ人しらず「かげろふのそれかあら
ぬか春雨のふるひとなれば袖ぞぬれぬる」

千載・雑下・俊頼「……夢にゆめ見るこちして……」

右にあげた拾遺集の本歌、古今集・千載集の参考歌の言葉を取
ながらも、初句に「はかなしな」と置き、そのあとにはかないイメ
ージを持つ言葉続け、下句において、「それも絶えぬるなかの契り
は」と、心細い感じの極限ともいうべき状態を表現している。

右にあげた歌ほどの佳作とは思われないが、次にあげる歌は、知
的技巧が施され、それぞれ曲折のある、興趣ある歌となっていると
言えるであろう。

⑬白露のおくとはなげくとばかりも夢の直路たぢやこと通ふらむ

(忍恋)

(本歌) 古今・恋一・よみ人しらず「つれもなき人をやねたく
白露のおくとは嘆きぬとは忍ばむ」

古今・恋二・藤原敏行「恋ひわびてうち寝る中にゆき通ふ夢の
ただちはうつつならなむ」

⑭名取川心のはむことのはも知らぬ逢ふ瀬は渡りかねつつ

(不遇恋)

(本歌) 後撰・恋三・よみ人しらず「なき名ぞと人には言ひて

ありぬべし心とはばいかがこたへむ」

⑮あまの刈るよそのみるめをうらみてもよるはたもとにかかる波
かは (不遇恋)

(本歌) 後撰・恋四・源善「近江てふ方の知るべもえてしがなみ
るめなきこと行きて恨みむ」

⑯わが恋よなにかかれる命とてあはぬ月日のそらに過ぐらむ

(不遇恋)

(本歌) 源氏・夕顔「うつせみの世はうきものと知りにしをま
た言の葉にかかる命よ」

(参考歌) 金葉・恋上・皇后宮女別当「たのめおくことのはだ
にもなきものをなにかかれる露の命ぞ」

⑰命とてあひ見むこともたのまれず移る心の花のさかりは

(遇不逢恋)

(本歌) 古今・春下・よみ人しらず「春ごとに花のさかりはあ
りなめどあひみむことは命なりけり」

古今・恋五・小町「色みえでうつろふものは世の中の人の心の
花にぞありける」

⑱海とのみ荒れぬる床のあはれわが身さへ浮きぬとたれに伝へむ

(遇不逢恋)

(本歌) 古今・恋四・伊勢「わたつみとあれにし床を今さらに
払はば袖やあわと浮きなむ」

⑲色かはるみの中の山秋こえてまた遠さかる逢坂の関(遇不逢恋)

(続古今八恋四V入集)

⑳あけぬなりおのが心のあたら夜は昔結ばぬ契り知られて

(怨恋)

(参考歌) 源氏・夕顔「先の世の契り知らるる身の憂さに行く
未かねて頼みがたきよ」

次にあげる二首は、知的技巧はあるけれど、比較的平淡な歌にな
っている。

②水くきの人づてならぬあとにだに思ふ心は書きも流さず

(怨恋)

③よりかけてまだ手になれぬ玉の緒の片糸ながら絶えや果てなむ

(不遇恋)

(本歌) 古今・恋一・よみ人しらず「片糸をこなたかなたによ
りかけてあずは何を玉の緒にせむ」

(参考歌) 千五百番歌合・定家「片糸のあふとはなしに玉の緒
も絶えぬばかりぞ思ひ乱るる」

以上、この百首における定家の恋の歌を概観したのであるが、五
題二十五首を配列順にたどって、同じ題の歌の中における変化の妙
味を考えるということには、まだ触れていない。それは紙幅の関係
で省略する。

六

この百首において、恋の歌以外の歌を見よう。まず最初の霞題の
五首、

知らざりき山より高きよはひまで春の霞の立つを見むとはいも（統
古今八雑上V入集）

み吉野は春の霞の立ちどにて消えぬに消ゆる峰の白雪

洞院撰政家百首における定家の歌 — 恋の歌を中心として —

いつしかと都の野べは霞みつつ若菜つむべき春は来にけり

たづぬともあひ見むものか春来てはふかき霞の浦の初鳥

いく春の霞の下に埋もれておどろの道の跡をとふらむ

を見ると、いかにも平明で平淡な歌が並べられていて、創作力の減
退を思わしめるのである。しかしながら、この百首全体の中には、
次のような佳作がまじっているのが見られる。

吹きはらふもみちの上の霧はれて峰たしかなる嵐山かな

(眺望)

は、安東次男氏の言ことわれるように、「吹きはらふ」と大胆に詠み起
し、「峰たしかなる嵐山かな」と言い据えたところは、やはりした
たかな表現である。また、

雲のゆくかた田の沖やしぐるらむや影しめるあまのいさり火

(眺望)

は、雲の動きとともに、はらかな沖のあまのいさり火が時雨によっ
てしめって見えるという、縹渺とした眺めを詠んだ佳作であると考
えられ、また、

たちちねの及ばず遠き跡過ぎて道をきは極むる和歌の浦人（述懐）

は、偉大な父俊成の跡を受け継いで、和歌の道をはるばる歩き、努
力を重ねてこの道をきわめようとして晩年を迎えた、定家の深い思
いがよくうかがえる歌である。

定家は、この百首から「新勅撰和歌集」に、

もしきのとのへを出づる宵々は待たぬにむかふ山の端の月

(眺望)

しぐれつつ袖だにほさぬ秋の日にさこそ御室みむろの山は染むらめ

(紅葉)

の二首を自撰している。この二首は平明でありながら、的確な構成力を發揮し、巧みな言葉続きを用い、その時の盛り上がった情感をよく表現している佳作である。なお、勅撰集全体には、右の二首を含めて計十五首(うち、恋の歌からは五首)入集している。

七

さきに述べたように、この百首においては、万葉歌をふまえた歌の急減、序詞を用いた歌の減少という点から見て、建保期とは変わった新しい心持で歌を詠んだと考えられる。また、老齡などのために創作意欲の減退は考えられる。しかしながら、さすがに長い間作歌に苦心しただけあって、鍛えられた構想力、言葉続きを練り上げる力は、底力として残っていたと言えるであろう。全般的に見れば平明で平淡な歌も多いけれども、恋の歌を中心として、またその他の歌にも、光り輝く佳作がまじっているのを認めることができる。

この百首は、前述したように、貞永元年(一二三二)の成立であって、それは定家七十一歳の時であった。定家は八十歳まで生きたけれども、この百首の成立した翌年天福元年(一二三三)、彼が出家する時に詠んだ歌が、『拾遺愚草』に収められている制作年時の判明する歌の中で最後のものではあった。

〔注〕

1 本文は、片野達郎氏・安井久善氏著『校本洞院撰政家百首とその研究』による。なお、赤羽淑氏編著『藤原定家全歌集』を参

考にした。

2 安田章生氏『藤原定家研究』一五九ページ。

3 塚本邦雄氏「座談会・和歌と短歌の間」国語科通信八角川書店V52、一九八三。

4 家隆は、洞院撰政家百首の参加者に加えられたとき、まず

(A)「前宮内卿落素百首」を詠み、ついで改編して(B)東北大本「家隆百首」とし、更に改編精選して(C)「壬二集百首」にして

いる。この百首に関しては、小論「洞院撰政家百首における家隆の改編精選の様相」(日本文学研究、第一九号、梅光女学院大学、昭58・11月)において、万葉歌をふまえた歌についてはその万葉歌をも付記して述べた。

5 定家の歌は、赤羽淑氏編著『藤原定家全歌集』による。

6 万葉集の歌は、日本古典文学大系による。

7 注4の小論。

8 序詞の認定の基準については、上田設夫氏「万葉序詞の研究」二二九ページによる。

9 家隆の洞院撰政家百首については、三種のうち最後の壬二集百首について調査した。注4参照。

10 このことについて、上田設夫氏は、「自然物と心情とが融合して一首を構成する詩歌形態は、恋愛詩歌に多用される表現形態で、いわば人間感情の自然な形での発露とみることができ。つまり、恋愛詩歌というものが、本質的に人間をとりまく自然とつながりやすいことを物語っている。ことに序歌の場合、和歌というわが国固有の詩歌形態のなかの修辭であり、し

かも日本的な民族性と風土性に育まれて機能した表現形態とみるべきものである。」(注8の書、二五四、二五五ページ)と述べておられる。

11 注8の書、四六六ページによる。

12 鈴木日出男氏「古代和歌における心物対応——万葉から平安和歌へ——」国語と国文学、昭和45・4月

13 樋口芳麻呂氏「定家八代抄と研究」によれば、建保三年正月十三日以降建保四年正月十三日までの間に成立したもので、建保三年中成立の可能性が強いとされる。藤平春男氏は「新古今歌風の形成」一七九ページにおいて、「定家八代抄は八代集から定家の認めた歌一八一一首を抜き集めた詞華集であると同時に作歌に際しての技術的参考書でもあった」と述べておられる。

14 小論「内大臣家百首の定家の恋の歌における主情的表現」(「新古今歌風とその周辺」所収)

15 藤平春男氏「古今的表現の屈折」国文学解釈と鑑賞、昭45・2月

16 石田吉貞氏は、定家の枕詞の使用数について、建保期になると、文治・建久期の約三倍、新古今期の約二倍となっていることを指摘し、(稿者注、六百番歌合百首、3、千五百番歌合百首、4、内裏名所百首、9等を表にして示してある)その理由として、定家ははじめ「できるだけ複雑な内容を盛ろうとする傾向にあったが、直接に意味に関係の無い枕詞(序詞もそうであるが)など避けようとしたものであらうと思われる。ところが

抒情が主になり、音楽性が主要な位置を占めるようになると、内容を複雑にする為に意味のある言葉をよく用いるよりも、場合によってはむしろ意味のない、ただ音調を助けるだけの言葉の方が必要な場合があるわけである。別な言葉で言えば、意味内容の複雑さから、気分内容の複雑さに移つたかとも言えるであらう。とにかくそのような理由から、枕詞が比較的多く見られるようになった。」(「藤原定家の研究」三五四ページ)と述べておられる。「有心の序」の場合は、物象的表現が心象表現と対応させられることによって、イメージの明確化、統一感の醸成に役立ったと考えられる。

17 久曾神昇氏・樋口芳麻呂氏は「新勅撰和歌集」(岩波文庫)の解題による。なお、同解題において、「柿本人麿、大伴家持、山部赤人の歌は、人麿集、家持集、赤人集より取材したと考えられ、万葉集に取材したものは四十四首ほどであらう。」と述べておられる。

18 久保田淳氏「新古今和歌集全評釈、第三卷」一八九ページ。

19 佐々木幸綱氏「中世の歌人たち」一〇〇ページ。

20 小論「新勅撰和歌集における春歌の構成と特質」(「新古今歌風とその周辺」所収)および小論「新勅撰和歌集における夏部の構成と特質」(日本文学研究、第一四号)

21 小島吉雄氏「新古今和歌集の研究、続篇」一四〇ページ。

22 定家が建保四年(一一二六)に二百首を撰んで結番し、建保五年に改訂し、更に貞永元年(一一三二)ころ再び一〇首をさし替えている。この自歌合に定家は全時期の秀歌を盛りこもう

と意図し、各時期の歌風の特徴を混在させている。

23 定家がこの百首の参加歌人二十三名の歌全体から新勅撰集に入集させた歌は計四十首で、その中で恋の歌は計十二首（教実

3、家長2、範宗1、中宮恒馬1、中宮少将1、道家1、夷氏1、俊成女1、有長1）であった。

24 定家が自分の「百番自歌合」を建保五年に改訂し、更に貞永元年（一二三二）ころ十首をさし替えた、その十首のうちに「洞院摂政家百首」の歌が六首含まれ、そのうち恋の歌が四首である。

25 安東次男氏「藤原定家、日本詩人選II」二七四ページ。

26 新勅撰2、続古今6、続拾遺3、続後拾遺1、新千載1、新拾遺2。

27 安田章生氏「藤原定家研究」一五九ページ。